

第三十一回 劉先主遺詔して孤兒を託す、天兵に抗して蛮王初めて執えを受く

— 遺弧を託す —

(前回から今回まで)

陸遜は劉備を大敗させると、その勢いのまま攻め上ろうとの意見をしりぞけ、魏の曹丕が隙をついて攻めてくることを予測し、呉に戻っていきます。案の定、曹丕は、曹仁・曹休・曹真を派遣し、三方面から呉を攻めてきます。

魏の攻撃に対し、呉は呂範が曹休を、諸葛瑾が南郡で曹真を、朱桓が濡須口で曹仁を防ぎます。朱桓はこのとき二十七歳、「曹仁の軍は千里の道をやってきて、人馬共に疲れ果てている。恐れるに足りない」と兵を励まし、曹仁軍を破ります。そして、曹真も陸遜と諸葛瑾に敗れ、曹休は呂範に敗れて引き返していきます。

一方、白帝城（永安と改名）にとどまった劉備は、このとき病に倒れます。

(本文抄)

さて、永安宮にいた劉備は病氣にかかつて起き上がれなくなり、しだいに病状は悪くなつていった。

章武三年（二二三）夏四月になって、劉備は病氣が四肢にまで及んだことを自覚し、また関羽・張飛のことを思つては泣くことが多く、病はいよいよつのる一方だった。両目もかすんできたので、近侍の者が側にいることも嫌がり、ひとり病床に伏していた。

と、突然、怪しい風が吹きおこつて、灯火をゆらゆら吹き動かし、消えたかと思つとまた明るくなる。見れば、灯火の影に二人の者が立っているではないか。

劉備は「退出するよう命じたのに、どうしてまた入つて来たのか」と叱りつけた。

それでも出て行かないので、起き上がつてじつと目を凝らすと、上手にいるのは関羽、下手にいるのは張飛だった。劉備は仰天して言った。

「おまえたちは、なんとまだ生きていたのか」

「われらはこの世の者ではなく、亡霊です。上帝（天界の神）には、われらがずっと信義を失わなかつたので、二人とも神にしてくださいました。近々、兄貴もわれら弟とお会いになります」と関羽。

劉備はその手をとらえて大声をあげて泣いたが、ふと気がつくつと、二人の姿はもう消えて

いた。さつそく従者を呼んでたずねると、ちょうど三更（午後十一時から午前一時の間）だった。劉備はため息をつきながら言った。

「朕はまもなくこの世を去るだろう」

（解説）

病床の劉備の前に、関羽と張飛の亡霊が現われ、間もなく兄貴と会うことができると告げます。彼らは、あの世から劉備を迎えに来たのです。「桃園の誓い」で、三人は「同年同月同日」に死のうと誓い合いました。しかし現実にはそれはありませんでしたが、『三国志演義』は、その誓いのままに、三人ともに手をたずさえて旅立っていくことにしています。

（本文抄）

諸葛亮は、その場に泣き伏して言った。

「どうか陛下には一日も早く病から回復してください。私どもは命を捨てて、陛下の知遇にお答えいたします」

劉備は側近の者に命じて諸葛亮を助け起こさせ、一方の手で涙を拭いながら、もう一方の手で諸葛亮の手を握って言った。

「朕はもう死ぬが、最後にぜひとも言うっておきたいことがある」

「どうか、お聞かせください」と諸葛亮。

「君の才能は曹丕の十倍はあり、必ずや国家を安んじ、最後には大事を成し遂げることができよう。もしも太子劉禪が輔佐するに足る人物ならば、これを輔佐してやってほしい。もしも才能がないならば、君がみずから成都の主になるがよい」と、劉備は涙ながらに言った。

諸葛亮はこれを聞くと、全身に汗があふれ、涙を流しながら、ひれ伏して言った。

「私は股肱の臣としての力を尽くし、忠義と貞節を捧げ、最後には命を捨てる覚悟です」

言いおわると、諸葛亮は頭を地に打ちつけて血を流した。劉備はそこでまた諸葛亮を座らせ、魯王劉永と梁王劉理を近くに呼び寄せると、

「おまえたちは二人とも朕の言ったことをしっかり覚えておくのだぞ。朕亡きあと、おまえたち兄弟三人（劉永・劉理および太子の劉禪を指す）は丞相を父と思つて仕え、決して怠つてはならんぞ」

言いおわると、二王に諸葛亮に対し拝礼するよう命じた。二王が拝礼しおわると、諸葛亮

は言った。

「私は肝腦かんのうを地にまみれさせても、陛下のご恩の万分の一にも報いることができましょうか」
劉備はさらにまた臣下一同に向かつて言った。

「もはや卿けいたち一人一人に頼むことはできなくなりましたが、どうかみな自愛してほしい」

言いおわると、そのまま息絶たえた。享年六十三。時に章武三年（二二三）夏四月二十四日のことであつた。

（解説）

黄巾の乱に際し、幽州ゆうしゅうの涿郡たくぐん（現在の北京近郊）で旗上げして以来四十年、劉備は、中国大陸の過半を戦いのなかに駆け抜け、ここ白帝城（現在の重慶市）で六十三歳の生涯を閉じます。漢の血統につながるとはいえ、草鞋わらじを織り蓆むしろを編んだ貧しい若者が、蜀漢（現在の四川省）の皇帝にまでのぼり詰めます。まさに一代の風雲児といつていいでしょう。しかし、その過程は決して順調なものではありませんでした。劉備の人生はまさに「七転八起ななころびやおき」の言葉そのものでした。

多くの敗戦の憂き目にあい、しかも最後は「夷陵いりょうの戦い」で呉に大敗を喫しています。さ

ぞかし失意のうちに亡くなったと思うのですが、しかし劉備は起伏きふくにとんだ人生を振り返り、一切恨みがましいことは言いません。

『三国志』諸葛亮伝の注「諸葛亮集」（井波律子氏訳・ちくま学芸文庫）によれば、息子劉禪に次のように言い残しています。

「わしが病気になった時、はじめは腹の調子が悪かったただだったが、その後、様々な病が加わり、どうやら回復することはなさそうだ。人間も、五十にもなれば早死には言わないが、わしはもう六十を越えているのだから、何を恨むこともなく、自らをいたむこともない。ただ、おまえたち兄弟のことが心配である。射君しゃくくん（諸葛亮の部下）が参り、こう申していた。丞相じょうしょうがそなたの知力がとても大きく、学問の進歩がいちじるしいと、感嘆していたと。それが確かであるのなら、もはやわしが憂うれうことはない。よく学び、よく励め。どんなに小さくとも、悪事を働いてはいけけない。善事は、どれほど小さくとも行え。賢かしこさと徳だけが、人を心服しんぷくさせることができる。そなたの父は徳が薄いから、見習ってはいけけない」と言い残して亡くなります。

また、「丞相諸葛亮と力を合わせて事に取り組み、父に対するごとく仕えよ」とも言い残しています。

劉備は自分の人生に悔いを残すことなく、また自分の死後は諸葛亮がいてくれるとの安心感を持って亡くなったのです。劉備は、諸葛亮に全幅の信頼を置いていました。有為転変を乗り越えた、人生の深みと価値を感じさせる劉備の生涯です。

今回は「遺孤を託す」の名場面ですが、前記の『三国志演義』の本文は、おおむね『三国志』の記述を踏襲しています。『三国志』の書き下し文のほうが格調が高いと思いますので、次に表記します（『三国志』諸葛亮伝より）。

先主、永安に於いて病篤し。（諸葛）亮を成都より召し、属するに後事を以てす。（諸葛）亮に謂いて曰く、「君の才は、曹丕に十倍す。必ず能く国を安んじ、終に大事を定めん。若し嗣子、扶く可くんば、之を輔けよ。若し其れ不才ならば、君自ら取る可し」
亮、涕泣して曰く、「臣敢えて股肱の力を竭くし、忠貞の節を効し、之に繼ぐに死を以てせん」

先主又た詔を為り後主を勅て曰く、「汝、丞相と与に事に従い、之に事て父の如くせよ」

この「遺孤を託す」の名場面は、古来、時代を超えて多くの人の心を打ちました。

陳寿は、「築いた国や遺児を諸葛亮に託し、なんら疑いを持たなかったが、これはまこと

に君臣のありかたとして至高のものであり、古今を貫く立派な出来事である」と評しています。

「論語」の「以て六尺の孤を託すべく、以て百里の命を寄すべく、大節に臨んで奪うべからず。君子人か、君子人なり」との言葉を、文字通り地で行く場面です。

(訳文・幼少の君を託されてよくその補佐を努め、諸侯の国家の政令を任せられて万民に政令を下し、大事にあつても節操を失わない。こういう人は君子だろうか。もちろん君子である)。

そして、諸葛亮はこの言葉通り、私心なく劉備の信頼に応えて生きぬくのです。

清代の歴史家趙翼は、「嗣子輔くべくんば之を輔けよ。輔くべからずんば、則ち、君、自ら之を取れ。千載の下、猶お其の本懐を肝膈(体の奥にある肝臓と横隔膜。転じて本心あらわす)するを見ず。豈に真の性情の流露に非ずや」(『二十二史劄記』)と、劉備の諸葛亮に対する、真心からの信頼をあらわすものとしています。

若いころ、友とよく歌った「星落秋風五丈原」は土井晩翠の詩です。

「祁山悲秋の風更けて・・・」ではじまる長い詩ですが、下はその一節です。

夢寐に忘れぬ君王の いまはの御こと畏みて

心を焦がし身をつくす 暴露のつとめ幾とせか

今落葉の雨の音 大樹ひとたび倒れなば

漢室の運はたいかに

丞相病篤かりき（最後の句は二回繰り返して歌います）

明治の詩人土井晩翠は、劉備の深い信頼に応えようとする、悲痛なまでの諸葛亮の想いを謳いあげます。

しかし一方で、この遺言を批判する意見もありました。

その一人は、明末清初の儒学者王夫之です。華夷思想と身分秩序重視の立場から陽明学を批判した人です。

三国志研究の第一人者である渡邊義浩氏は、王夫之が、この劉備の遺言を出してはいけないう「乱命」であるとし、「この遺言から、劉備が諸葛亮を、関羽のように全面的には信頼していないことがわかる」としたことを紹介されて、氏はこの遺言で、劉備が諸葛亮の篡奪の動きに釘をさしたのだと指摘されています（『こんなに面白かった三国志』大和書房）。

もう一人は清の第四代皇帝の康熙帝です。彼は、中国史上屈指の明君といわれ、数々の文

化的業績を残しています。また朱子学に傾倒したことでも有名な皇帝です。

康熙帝は『資治通鑑』のこの箇所を読んで、「昭烈（劉備）、亮において平日魚水を以て自ら喻う、亮の忠貞豈に深からざると知るや。遺を受くる時、何ぞ此の猜疑の語を作すに至るや。三国の人譎詐を以て相尚ぶや、鄙ならん」と書いています。（原文…昭烈於亮平日以魚水自喻、亮之忠貞豈不深知、受遺時何至作此猜疑語、三國人以譎詐相尚、鄙哉）。

劉備は、諸葛亮との「水魚の交わり」の例え通り、彼の忠貞な人柄は熟知していたはずだ。そうと知っていなかったのか、遺言で諸葛亮を疑うようなことを書くとは。三国時代の人は好んで譎詐を使ったのか、とても酷い話だ（資治通鑑の批評をまとめた『御批歴代通鑑輯覽』、国会図書館デジタルアーカイブ）。

康熙帝も、劉備の諸葛亮への遺言は、譎詐、つまり劉備はいつわって諸葛亮を牽制したと
いうのです。

たしかに、諸葛亮の篡奪を疑おうとすれば、いくらでも疑えます。事実、諸葛亮がその気になれば篡奪することができたでしょう。しかし、諸葛亮にはそんな気は毛頭なかったのです。

諸葛亮とともに劉備の遺詔を受けた李厳は、諸葛亮に手紙を送り、九錫（皇帝になる前に

臣下が受ける九の特権)を受けて「王」と称するよう勧めています。しかし、諸葛亮はそれに対して、あなたと知り合って長くなるが、私の心を理解していないのか、魏を滅ぼし漢室が復活したならば、諸君とともに榮譽をうけよう、と答えています。

諸葛亮の心は第一に、劉備から託された「大事を定める(漢室の復興)」にあったのです。王夫子と康熙帝の批判は、当時の主流である朱子学の立場からのものです。大義名分論・君臣父子の別を重視する朱子学からみれば、臣下である諸葛亮に皇帝となれということ自体、驚天動地、まさに「乱命」そのものです。後世の価値観をもって、劉備の発言を「乱命」と批判しているのです。

明治の東洋史学者である那珂通世なかみちよ氏は、「中国中世の丞相のうち、帝位を狙わず忠義を尽くしたのは諸葛亮の他は東晋とうしんの王導おうどう・前秦ぜんしんの王猛おうもうら数名だけである」と述べ、「諸葛亮などの僅かな例外を除くと、司馬昭しばしょう・劉裕りゅうゆう・蕭道成しょうどうせい・侯景こうけい・楊堅ようけん・李淵等りえんの丞相職にあった人物はすべて皇帝位乗っ取りを図った。丞相職は国家乗っ取りの階段である。姦雄が帝位篡奪さんだつを図る時にまず狙うのが丞相の位であった」と指摘されている(「支那通史しなつうし」岩波文庫中冊、原漢文書き下し)。つまり丞相の諸葛亮は、数少ない例外のほうだったのです。

事実の上でみると、諸葛亮は権力をほしいままにすることもなく、清廉潔白せいれんけつぱくな一生をつら

ぬいています。晩年の諸葛亮の財産は成都にある桑八百株とやせ田十五頃けいだけであり、諸葛亮は、それで家族の生活は十分、死後に余分な財産を残すことはしないと云って、死後、その言葉通りであったことが『三国志』に記されています。

仮に、劉備が諸葛亮の篡奪を疑って釘を刺したとしても、それは全くの杞憂きゆうでした。でもそれは、とても穿うがった見方のように思います。

さて、魏の曹丕は劉備が死んだと聞くと、五路ごろ（羌きやうの軻比能かひのう、南蛮なんばんの孟獲もうかく、叛将はんしようの孟達もうたつ、魏将の曹真、呉の孫権）の大軍をおこし四方から蜀を攻めようとしています。しかし、諸葛亮が対策をとっていたため、すべて失敗します（「諸葛亮安居あんきよして五路を平らぐ」）。これは『三国志演義』のフィクションです。

次いで、曹丕は蜀を攻めようと呉に持ちかけますが、諸葛亮は先手をうって鄧芝とうしを呉に派遣し、鄧芝の巧みな弁舌で蜀と呉は和睦わぼくをしたので、曹丕のころみはまたも失敗します。今度は、曹丕がみずから大軍を率いて呉を攻めますが、呉の將軍徐盛じよせいの巧みな用兵にひっかかって敗退します（「曹丕を破るに徐盛火攻を用う」）。

こうして蜀はしばらくの間、平和な時が続きます。その間、連年豊作が続く、米は倉にいっぱい貯蔵され、財貨は倉庫に満ちあふれました。そんなおり、南蛮王の孟獲が国境に侵入

し、これに建寧の太守雍闓らが呼応したとの知らせが入ります。

諸葛亮の南蛮征伐の名場面のはじまりです。

諸葛亮みずから五十万の大軍を率い、まず建寧の雍闓の平定に向かいます。そして、雍闓を「反間の計」で欺いて殺すと、帰服した雍闓の部将高定に、三郡（建寧郡・牂柯郡・越巂郡）の管轄を任せます。

次いで、諸葛亮は、未踏の地である南蛮地方の平定に向かいます。

そこへ、馬謖が劉禪の使いとしてやってきます。諸葛亮が馬謖に助言を求めると、馬謖は、「南蛮は撃破してもまた叛旗をひるがえします。兵を用いる方法は、『心を攻むるを上となし、城を攻むるを下となす。心の戦いを上となし、兵の戦いを下となす』と申します。彼らの心を屈服させられますように」と言います。

諸葛亮は馬謖の言葉に感嘆し、馬謖を参軍に任じます。

蛮王の孟獲は、雍闓が諸葛亮に破られたとを知ると、三つの洞（南方諸民族の集落の単位）の元帥である、金環三結元帥、董荼那元帥、阿会喃元帥の三人を進軍させます。

敵将の名前から、南方の異民族の世界に足を踏み入れたことを印象づけます。ただし、孟獲の名に違和感はありませんが、それは彼は『三国志』に記載される実在の人物なので、そ

のまま使っているのでしょう。

ここでも、諸葛亮は策をめぐらし、三人の元帥を打ち破ります。南蛮王の孟獲は、三人の元帥が敗退したことを聞くと激怒して進軍しますが、趙雲らの蜀軍に大敗を喫し生け捕りにされてしまいます。

(本文抄)

そのとき、突然、山谷からドンと一発、太鼓の音が鳴り響いた。これぞ、諸葛亮の命令を受けた魏延ぎえんが五千の歩兵を率い、ここで待ち伏せしていたのだ。孟獲はとても防ぎきれず、魏延に生け捕りにされ、お供の者たちも全員降伏した。魏延は孟獲を本陣まで護送し、諸葛亮にお目通りさせた。

陣幕のなかに入られた孟獲が跪くと、諸葛亮は言った。

「先帝（劉備を指す）はおまえを手厚く待遇してくださったのに、どうして謀反ぼうはんしたのか」。両川りょうせんの地はすべて他人のものなのに、おまえの主人がむりやり奪い取り、みずから皇帝と称したのだ。わしは先祖代々、この地に住んでいるのに、おまえたちが無礼にもわしの土地を入ってきたのだ。謀反などと言われる覚えはない」と孟獲。

「私はおまえを生け捕りにしたが、おまえは心から服従する気はないか」と諸葛亮。

「山が険しく道が狭かったため、誤っておまえに捕まったまでのことだ。服従などするものか」と孟獲。

「服従しないと言うなら、逃がしてやってもよいが、どうだ」と諸葛亮。

「わしを釈放し帰してくれたら、もう一度、軍馬を整え、勝負を決したいと思う。もしもう一度、わしを生け捕りにできたら、その時は服従しよう」と孟獲。

諸葛亮はただちにその縛めを解いて、衣服を着せ、酒食を与えてから、鞍をつけた馬に乗せ、自分の本陣へ帰らせた。

(解説)

諸葛亮は、捕らえた孟獲を帰してしまいます。そして孟獲は、もう一度勝負をして捕らえられたら降参するといつて帰っていきます。「七擒七縱」の一回目です。

有名な諸葛亮の南蛮征伐ですが、『三国志』本文には、わずかに「諸葛亮は軍勢をひきいて南征し、同年秋ことごとく平定した。軍需物資が出るようになり、国はそれで豊かになった」と書くだけです。

その箇所注に引く「漢晋春秋」には、もう少し詳しく以下のように記しています。

「『漢晋春秋』にいう。諸亮は南中なんちゆうに到達するまで、行く先々で戦勝をおさめた。孟獲というものがいて蛮人にも漢人にも心服されていると聞き、懸賞金けんしょうきんをかけて生けどりにして連れてこさせた。捕えたあと、陣営の中を観察させ、『この軍はどうじゃ』と尋ねた。

孟獲は、『以前は中の動きがわからなかったために、敗北しました。いま陣営を拝見させていたたきました。もし、この程度のことならば、まちがいなしに簡単に勝利をおさめられますぞ』といった。諸葛亮は笑って釈放しもう一度戦わせた。七度釈放し七度捕えたが、諸葛亮はなおも孟獲を放してやろうとした。孟獲は止まって去ろうとせず、『公は天のご威光をおもちです。われら南人は二度と背かないでしょう』といった。かくて滇池てんち（雲南省）に到達した。南中が平定されると、彼らの頭領とうりやうをすべてそのまま任用した」（前掲書）。

わずかこれだけ記事をもとに、『三国志演義』は八十七回から四回にわたって（毛宗崗本）、諸葛亮の南蛮征伐を延々と描きます。このあとは、今までの『三国志演義』とは一味違う、異境の空想物語のような観を呈していきます。